

博物館はヨーロッパ最大・最良の医学史博物館である。また別の場所にあるウエルカム医学史研究所には、多数の常勤研究者がおり、医学史図書室、医学史小展示コーナーがある。エディンバラの外科カレッジ博物館も中規模ながら展示の質がよい。イギリスには各地に個人の医科学者多くはかつての居宅、診療所、実験室)にちなんだ小博物館がある。

オランダはライデンのブルハーヴェ博物館とその図書室が充実しており、常勤の事務職員がいる。医学史研究施設は、ライデン大学(解剖学博物館、病理博物館(非公開)などもある)にあり、常勤の研究者が一名(ボイケルス教授)いる。ロッテルダム大学にも常勤研究者がいる。グロニンゲン大学とウトレヒト大学には大学博物館があり、常勤研究者がおり、医学史展示がある他、付設図書室もある。この国の大図書館の総合図書目録は、日本からインターネットで接続が可能であるので、蘭古医書の検索は容易である。

バルト三国の一つ、ラトビアの首都リガの医学史保存状況はきわめて良い。医学史博物館、薬局博物館、解剖学博物館がある他、医学史研究所には多数の常勤研究者がいる。

ハンガリー、スロバキア、ルーマニアなどの旧東欧諸国には、薬局博物館が多い。またハンガリーには古図書館が

各地に保存されている。索引が整備され、古医書が閲覧できる。

イタリアでは各大学ごとに小さな医学、解剖学博物館がある。常勤の研究者はいるが、予算措置がなされていないので、展示品の整備は不良で、埃をかぶっている。

以上、ヨーロッパのいくつかの国を取り上げたが、医学史料収集、保存、管理の状況は各国まちまちである。しかしながら、これらの業務は制度化されている国が多く、常勤研究者数は日本よりはるかに多い。また各国の医学史料収集、保存、管理のための対GNP比の予算総額も日本よりはるかに多いと推定される。

#### 4

石原 力

医学史のうち、文献の収集、保存には、個人的レベルのもの、図書館その他の施設におけるものがある。ここでは前者について述べる。

個人で史料もしくはそのコピーを手許に所持することは、研究に当って好都合であり、むしろ不可欠といつてよいであろう。しかし、これには経済的、時間的、労力的、

プライバシー等々の困難が伴う。最近では情報公開の趣旨から、公的、私的施設でも、史料の閲覧、撮影、複写が容易になり、個人所有者もこれらに協力的になってきたのは有難い。しかしそれを当然として、研究熱心の為か、傍若無人の態度で齟齬を買っている研究者の話を目にする。貴重なものを見せて頂くといい謙虚さが、公共の施設であっても必要である。

閑話休題、史料の所在調査について述べたい。国内の図書館所蔵古書については、『国書総目録』や『古典籍総合目録』等により検索できる。また王氏他の労作「日中韓古医籍の所蔵目録」(日本医学史雑誌四〇巻四号七一頁)は、各種図書館等施設刊行の古医書目録のリストで、大変有益である。ただこれらのすべてに当って調査することは難かしい。

これらに洩れている古医書で、特に個人の所有本について、早急な調査と目録の刊行が望まれる。昭和五十一年医学文化保存会から出版された『医学古書目録』は正にそのようなものであったが、その後の変動もあろう。小川鼎三先生は「刊行のことば」で、この目録の第二集、第三集の発行を期待している。医学文化保存会に現在その力が無いとすれば、日本医学史学会が中心となり、第二集を刊行する

ことを提言したい。

またこれよりは困難が予想されるが、できれば十九世紀以前の洋医書についても、本邦所在目録の作成を提言したい。

洋医書について大学医学部図書館等の所在目録は、新しいものについてはあるが、古い洋医書についてはないようである。以前蘭学資料研究会で特志の方々により『日本に所在する蘭書目録』が作られたというサンプルもある。ある大学医学図書館で古い洋医書が未整理のまま積み上げられているのを見たが、和書と異り、言語の障壁があつて、職員の労力だけでは片付かないのであろう。有能な会員の援助が望まれる。

最後に稀覯本の覆刻事業の推進を第三の提言としたい。その必要性について云云することは無用と思われる。松本明知氏が前から個人的にこの面で業績を出していることに敬意を表したい。私も及ばずながら、『西洋産婦人科翻訳書集成』の刊行に着手したが、まだ完成しない。会員の方々が、中々得がたい史料をポピュラーなものにして、一般の研究者の需要にこたえることを心懸けて頂きたいとお願いするものである。